社会福祉の現場に「ソーシャルワーク」はないのか？

－新たな観点を得るための現場実習－

○　武蔵野大学通信教育部　　氏名　前廣 美保（会員番号 8308）
本多 勇（武蔵野大学通信教育部・3472）

キーワード：ソーシャルワーク、現場実習、新たな観点の獲得

１．研 究 目 的

社会福祉士養成教育において、現場実習は、それまでの学びで得られた知識と実践を統合する機会である。本課程は主に社会人を対象とした通信教育の大学であるため、多くの学生は限られた時間をやりくりして、4 年次の秋に現場実習に臨む。相談援助経験こそないものの、介護、教育、医療、事務など福祉の関連分野を中心に就労経験のある学生がほとんどである。教科書で学んできた専門的な知識や技術を、実体験から身につけたいと、意欲の高い学生が多い。

そのような実習生のひとりが、配属された現場の職員から言われた一言が、今回の研究のきっかけとなった。「特養にはソーシャルワークはないよ。」と 24 日間の現場実習のほんの初めにそう聞いた実習生は学ぶ意欲を一時失い、そつなく介護をこなして過ごせばいいのかと考えた。しかし、担当教員に相談して、この言葉を実習全体のテーマにしようと考えを変えたところから彼女の学びは深められ、受け入れ側にも変化があって、実習終了時には、「ソーシャルワーク」ついて、彼女なりの新たな見解を持つことができていた。

この実習事例を中心として、「ソーシャルワーク」を学ぶ社会福祉実習現場において、日常の実践を専門用語で表現するために、実習生が観点を新たに獲得する意義を考察する。

２．研究の視点および方法

「福祉の現場にはソーシャルワークはないのか？」という問いかけを通して、実習に取り組む姿勢と学びの視点を変化させた実習生の実習記録と、教員の指導記録を分析の素材とする。介護などの職業経験のある実習生が、福祉施設・機関で「ソーシャルワーク」を理解するためには、どのような観点が求められるのかを、事例研究として考察する。

３．倫理的配慮

研究対象となる実習生とその配属施設には、実習の経過や実習中のエピソードを取り上げることについて十分に説明を行い、承諾を得ている。また、個人や施設、地域などが特定されないよう仮名を用いた上、いくつかの実習事例を統合して、内容を加筆、修正している。

４．研 究 結 果

特別養護老人ホームなどの生活施設での実習において、社会人学生が「ソーシャルワー

ク」を学ぼうとした場合に、「理想のソーシャルワーク」と「現場の日常業務」の間に観点または視点のずれを感じる場合、以下のような状況があげられる。

１．施設での指導者としての社会福祉士は、ひとりか少数であるため、日常的な関わりにおいては介護職員と過ごす場面も多い。実習生は、介護技術や日常生活以外のソーシャルワーク視点の質問（生活歴、権利擁護など）がしにくく感じがちである。一方で、介護職員は「ソーシャルワークは教えられない」と口にすることがあった。

２．実習生が、指導者や現場の介護職者より年齢が高かったり、職歴が長かったりすることがある。「当然できるよね」「これくらい知っているはず」と思われてしまったり、指導者側が遠慮してしまったりすることもある。

３．現場の指導者が、指導経験が浅かったり、複数の職務を兼務していたりするため、実習生への指導に慣れていなかったり、関わりのための時間を取りにくい。

４．実習生は現場の忙しさを理解しているが故に、質問をすることをためらったり、日常の流れで決められた仕事をこなすことを優先して「働いて」しまったりする。

５．実習生側がこれまで学んだ知識や理論、技術を持ち出して現場の実践を評価しようとすると、施設側は理想と現実のギャップを責められているように感じる場合もある。

５．考 察

結論から言えば、社会福祉の現場には当然ながら「ソーシャルワーク」は存在している。しかしながら、現場での煩雑な介護や事務仕事に追われている職員は、自分たちが行っている業務がどのような専門用語で呼ばれ、どのように解説されているのかを、ゆっくりと考える余裕を持たない場合が多い。社会福祉士実習指導講習を受けている指導者がひとりいたとしても、ほとんどの場合、その指導者が理解している事柄がすべての職員に周知されている訳ではない。実習生がほとんどの時間を一緒に過ごす介護職員は、「ソーシャルワーク」とは何かを考える機会が少ない傾向にある。

それが学びの障壁になっているのかといえば、実はそうではない。実習生は相談支援の現場実際を、体験を通して理解を深め、それまでに学んできた専門的な言葉を使って、現場の実践に『名前』をつけて概念化し整理することが求められる。その過程こそが、新たな観点の獲得であり、真に「ソーシャルワークとは何か」をわかることである。

つまり、実習生を受け入れることによって、支援の現場は日常の仕事を新たな観点から捉え直す機会を持ち、より専門性を高めることができる。職員が何気なく行っている実践を教科書の言葉でこのように表現できる、と気づくことで、実習生だけでなく、指導者も、教員も、現場の支援者も、ともに学び合う機会を共有できる。

まだまだ発展途上の社会福祉の支援現場において、「ソーシャルワーク」の専門的な価値と倫理を、言葉を使って明らかにする作業は、まさに、学術・教育と実践を結びつけ、ともに成長し、専門性を高める営みであるといえる。